本稿は、相撲趣味の会会誌「相撲趣味」に掲載されたもので、内容の無断転載を禁じます。書誌情報の詳細は文末を参照して下さい。転載等の希望は相撲趣味の会に問い合わせて下さい。

笘ヶ島の再評価と考証

笠原　二郎

はじめに

笘ヶ島浦右衛門は、安永～天明年間の江戸大相撲幕内で活躍した、阿波徳島出身の力士である。これまで判明している限りでは、明和年間以前に江戸の大相撲幕内に継続して在位した阿州頭書力士はおらず、また安永年間も笘ヶ島が江戸に出る前に入幕した阿波徳島出身力士はいないことから、笘ヶ島はその後に相撲王国と呼ばれる地域で笘ヶ島を再評価する動きがあり、出身地である板野郡松茂町の三社宮拝殿内に掲示された略伝と絵図が、同町教育委員会により、令和二年三月に有形文化財指定された。筆者はこれを大変喜ばしく思う一方、史実として疑わしい言い伝えなどが将来一人歩きするのではないか、若干の懸念も抱いている。本項では、筆者が調査した範囲内で得られた情報と考察を示すことで、出来る限り史実に基づいた笘ヶ島伝を後世に残す一助になれば幸いである。

笘ヶ島以前の江戸の阿波力士

明和以前の江戸で名前が挙げられる、阿波徳島に関連した力士のうち、現時点でおそらく最も古い時代の力士は、菅谷勘四郎と槇ノ尾曾津之助であろう。これらの力士を古番付で目にしたことはないが、後世になって発行された複数の勇力関取鑑の類に、阿波あるいは阿州頭書で示されている。しかし番付記録がなく正確な出身地も不明であり、おそらく元禄以前から宝永あたりの力士と思われるが、伝説の域を出ない。槇ノ尾については元禄

十年の江戸番付を根拠にする記述もみられるが、その番付の真偽は大いに疑わしい。次に明和元年の京都番付で、阿州頭書の西大関に在位した大灘磯右衛門が、同年十月に江戸番付の東看板大関に位置したが、その頭書は九州になっており、出身地は不明である。このように、少なくとも明和以前の江戸の大相撲番付で、阿州頭書または阿波徳島出身であることが特定可能な力士は、現在のところ一人もいない。

一方、徳島藩主が蜂須賀重喜から長男の蜂須賀治昭に代わった後の安永元年十一月、江戸番付東三段六枚目に初めて阿州頭書の早渡嘉市（後に一ツ守）が登場し、以降天明二年二月まで、途中に江戸頭書もありながら活躍するが、最高位は東幕下二枚目であった。続いて安永二年十月に江戸頭書の江戸ヶ崎五郎治が、安永三年十月には大坂頭書の雄山岩之助が出て、前者は安永六年十月に阿州頭書の由良海五郎治に改名して最高位東幕下十一枚目、後者は安永九年三月に阿州頭書で東三段目五枚目、いずれも早渡（一ツ守）と同じく天明二年二月が最終場所であった。また安永四年十月に江戸頭書で西大関に在位した虹ヶ嶽杣右衛門は奈良出身、安永七年三月から最終場所となる天明三年十月までの間、阿州頭書の徳島藩抱えになった。以上が笘ヶ島より前に江戸の番付に登場して、時期を問わず阿州頭書になった力士達である。

笘ヶ島の生い立ちと上方の大相撲

笘ヶ島の出身地である徳島県板野郡松茂町広島の三社宮（図一Ａ）は、別称として笘ヶ島神社とも呼ばれ、「松茂町誌」に依ればかつて毎年八朔（八月一日）相撲が行われていたという。同書や昭和四十六年に出版された乾武彦氏の比類なき名著「阿波相撲史」には、かつての木造の鳥居と拝殿の貴重な写真が掲載されている（現在の石造鳥居は昭和五十六年建立、拝殿もＲＣ造に再建）。拝殿内には、略伝（図一Ｂ）と土俵入絵図（絵師不明、図一Ｃ）が掲示されているが、略伝の記載元号に錯誤があり、「元和元年秋にして拾三歳」としていたり、没年を「寛文元年、四拾七歳」としている。しかし笘ヶ島の相撲番付掲載年や墓碑に記載された没年月日（寛政四壬子歳閏二月十八日）とは、大きく矛盾していることを指摘しておく。略伝に依れば、讃岐から松茂の広島浦へ出稼ぎに

来ていた島谷友吉夫婦の子として、北川向の大西家納屋に出生した、とある。後述するように、大坂や京都の相撲番付登場当時は下の名を「藤次郎」または「藤治」としていたことから、島谷藤次郎または島谷藤治が幼時の本名だったのかもしれない。また略伝中の没年齢が正しいとするならば、生年は延享三年かと思われる。一方、絵図は横綱を締めた「苫ヶ島」が露払いの「寿高山」と太刀持ちの「磯千鳥」を従えて土俵入りしているものだが、そもそも笘ヶ島の最高位は東前頭筆頭で、現役中はまだ谷風と小野川の横綱土俵入さえ行われていない時代であり、両脇の力士も当時の番付に存在せず、史実から乖離した後世の創作空想図と言わざるを得ない。

笘ヶ島は大坂相撲の小野川門人であったことが知られているが、三社宮拝殿の略伝中には「木屋惣右衛門を師とし」とあり、墓碑には二名の木屋姓（總太兵衛、傳之助）が刻まれていることから（表二）、木屋氏は大坂での支援者もしくは寄宿先かと思われる。笘ヶ島の名が初見される大坂番付は、明和四年五月の西中相撲十枚目で阿州頭書の笘ヶ島藤次郎、年齢は二十一歳と思われる。その後しばらく見当たらないが、明和八年八月に西中相撲全書」に筆頭、天明期の名古屋で出版された「東西相撲ソレヨリ」に依れば「明和八卯五月大坂角力四日目に役入、一番モ負ズ」とある。無敗記録が明和八年の場所のみを指すのか、それ以降も続いたのか、当時の詳細な成績は不明であるが、大坂で相当な好成績を挙げていたことは間違いなく、明和九年八月に初めて上取りになって東前頭十九枚目、以降は翌安永二年から大坂最終となる寛政元年七月（全休）まで前頭に名があり、安永四年六月に下の名を改めて笘ヶ島浦右衛門としている。

一方、京都相撲では安永二年六月の番付で阿州頭書の笘ヶ島藤治が東前頭二十枚目で初見、以降天明四年まで毎年前頭に名があり、浦右衛門への改名は安永四年九月なので大坂の番付と矛盾せず、江戸へ下る時期に合わせての改名と思われる。

ちなみに四股名である笘ヶ島の由来は、紀淡海峡にある友ヶ島群島（地ノ島、沖ノ島、虎島、神島）の、沖ノ島の別称である。この群島は淡路島南東の由良港と和歌山の加太港を結ぶ直線上にあり、淡路（阿波路）と紀州を結ぶ最短ルートなので当時は盛んに海上往来があり、その後も現在まで連絡道路構想や海底トンネル構想、新

幹線計画などが提言されている。天気が良ければ、徳島空港離発着時の旅客機から眺めることも出来る（図二）。

なお「阿波相撲史」中に、竹冠の「笘」ではなく草冠の「苫」が正しいとあるのは、明らかな誤りである。

江戸大相撲の笘ヶ島

笘ヶ島は、安永四年十月に江戸深川八幡宮境内で興行された大相撲番付の東幕下七枚目に、阿州頭書の笘ヶ島浦右衛門として初めて登場し、その三枚下（十枚目、幕尻）には弟弟子の芦ノ海礒右衛門（後の鶴ヶ滝剛右衛門）が、やはり阿州頭書で位置している。この場所、笘ヶ島は五勝一敗二預と好成績で、特に三日目に達ヶ関（後の谷風）を破ったことが大いに評判を呼んだ。また「日本相撲史 上」には「大泉金剛記」を引用しながら、八日目に笘ヶ島が十万ノ海捷右衛門に敗れた一番の様子が記載されており、激しい差手争いを交えた互角の相撲描写から、「笘ヶ島はおそらく独特な取口をもった、相撲の上手な力士であったのだろう」と評している。

笘ヶ島の江戸での地位と成績を表一にまとめた。番付掲載された十九場所中、出場は十三場所、総番数九十一、白星五十三、黒星十六、引分六、預七、無勝負九、勝率五割八分二厘（勝敗のみでは七割七分）である。安永七年十一月には、八勝無敗一無勝負の最優秀成績を挙げた。

谷風に対しては江戸で番数十一、白星二（安永四年十月三日目、安永六年十月七日目）、黒星六、引分一（安永八年十月九日目）、預一（天明二年十月四日目）、無勝負一（安永五年十月六日目）、勝率は一割八分二厘（勝敗のみでは四割五分五厘）であった。また大坂本場所では安永六年と七年の夏に続けて預、安永八年夏に白星をそれぞれ挙げており、黒星は少なくとも天明三年の一はあったようだが、それ以外の年は対戦の有無を含めて不明な点が多い。京都での対戦は少なくとも安永六、七、八年と天明二、三、四年の六場所あって全て黒星六、それ以外は不明である。

安永十年三月に鬼面山谷五郎が江戸頭書で東序二段八枚目に初めて登場するが、天明二年十月には阿州頭書で三段目九枚目に位置する。これは、小野川喜三郎のお抱えを望んでいた蜂須賀治昭公が久留米藩の有馬公に先んじられたのに対し、笘ヶ島が代わりに京都の弟子であっ

た鬼面山を推薦したことによる、とされる。

笘ヶ島の江戸本場所の最終出場は天明六年三月で、四勝二敗、引分一、預一の成績であった。その年の十一月と天明七年十一月は、番付に名前はあるものの全休している。江戸を引退直後、ちょうど入れ替わるタイミングの天明八年四月に、勢見山兵右衛門が阿州頭書で東幕下筆頭に初めて登場する。この徳島出身力士もまた笘ヶ島と同じく大坂小野川門人、天明二年六月の京都本場所で秋津川を、翌年の大坂本場所で秋津島を名乗っている。こうした経緯から、笘ヶ島が蜂須賀公に、勢見山を地元出身の後継者として推薦した可能性が考えられる。

相撲浮世絵に描かれた笘ヶ島

笘ヶ島が江戸大相撲で活躍した安永～天明年間は、勝川派の絵師たちが多くの優れた相撲浮世絵を描いた時期と一致している。事実、笘ヶ島が描かれた浮世絵は、筆者が確認出来ただけでも八点は存在しており、それらの絵師は、勝川春章（四点）、春好（三点）、春山（一点）の三名であった。このうち春章が天明二年十月と思われる土俵を描いた東方力士土俵入図（図三）には、幕内の笘ヶ島や虹ヶ嶽のみならず、幕下の加治ヶ濱力右衛門、荒石捨松、鶴ヶ瀧、三段目の一ツ守、力石了助（後の渦ヶ崎）、鬼面山（絵図では京の頭書）と、この時の番付で八名の阿州頭書力士が描かれている。この絵図に描かれた力士十五名の半数以上が阿州頭書であることを考えると、当時の阿波徳島藩の大相撲に対する熱の入れようを窺い知ることが出来よう。

また勝川春好が描いた土俵上の真鶴と笘ヶ島の図（図四）は、その対戦が江戸で一番しかないことから天明六年三月場所の五日目（結果は預）と特定されるが、笘ヶ島の左膝に巻かれた布が目を引く。前述のようにこの場所は笘ヶ島が江戸の大相撲に出場した最終場所であり、左膝を負傷していたことが推察される。

笘ヶ島の評伝や逸話の考証

寛政年間に書かれたという阿州奇事雑話の写本（昭和十一年、横井希純）が、徳島県立図書館デジタルライブラリに公開されている。所々に文字の空白があり、写本

作成時に原本判読不明箇所だったと思われるが、原本が書かれた時期は笘ヶ島が活躍した頃から間もない時代であることから、比較的正確な評伝であろうと思われ、筆者の推定加筆文字も入れたものを付記一として引用後記した。ここには金銭物質に拘らず鷹揚な性格で、後輩や弟子の面倒見が良い相撲熱心な笘ヶ島の人物像が語られている。大坂商人の間で笘ヶ島の強さが評判になり「笘」印の商札は「決して負けない」という意味なる記述は、後述の略伝にも引用されている。

三社宮拝殿内の略伝は、昭和十二年一月に岡崎拾翠筆とされており、前述の通り錯誤もあるが、地域の子孫からの聞書きと思われる独自の内容も含まれており、付記二として引用後記した。文中に巡業先として出てくる麻植郡川田村は現在の吉野川市山川町にあり、元禄時代に「川田の一本」として知られた大坂相撲の相生峰右衛門ゆかりの地として、また明治の大関剣山谷右衛門ゆかりの地としても知られる、かつての相撲どころである。

昭和十五年に田所市太氏が著した「土御門院奉祀地問題と徳島（其二）」には「阿波相撲 徳島角力協會に對する希望」という見出しで、阿波相撲や笘ヶ島などの阿波力士に関する記述があり、笘ヶ島や勢見山らが蜂須賀公に抱えられ士籍に入ったことや、笘ヶ島の気高い人格などに触れている。

同書と、昭和二十八年に横山春陽氏が著した「阿波人物伝」中には、笘ヶ島と伊達ヶ関（谷風）との対戦逸話が記述されており、いずれもきわめてよく似た内容で、要旨は以下の通り。「伊達ヶ関を倒せば天下に名を成すと考えた初戦、肥満体の伊達ヶ関に対して笘ヶ島は立合いを長引かせて焦らし、相手の足が痺れたところで直ちに立って倒した（横山氏は上記の内容を京都での対戦としている）。大坂では両手の拳を固めて谷風の両脇を攻め、それを閂にするも痛みに耐えかねた谷風が両手を縦にするところを倒した（横山氏はこれを江戸の初戦としている）。京都では対戦前夜に両者酒を酌み交わして酔い、笘ヶ島は帰りに誤って卒倒して足を怪我した。翌日の対戦時に谷風は自らの足で笘ヶ島の怪我した足を蹴って攻めようとしたところ、笘ヶ島は相手のその足を取って倒した（横山氏はこれを大坂の対戦とし、左足を怪我していたと記述している）。」これらの記述が何を根拠に書かれたのか、筆者には典拠がわからないが、両氏は笘ヶ島の

対谷風戦白星が江戸・大坂・京都でそれぞれ一つずつあるように記述している。史実として谷風からの白星は江戸で二つ、大坂で一つあることは前述した。しかし京都で白星を挙げた記録は、現在のところ見つかっていない。これらの逸話もまた、三社宮の土俵入図と同様に、後世の創作である可能性も考えられる。ただ興味深いのは、横山氏が「左足を怪我していた」と記述している点で、もしかすると前述の勝川春好の画（土俵上の真鶴と笘ヶ島）に描かれた、笘ヶ島の左膝の包帯から、創作逸話の着想を得たのかもしれない。

笘ヶ島の墓碑

笘ヶ島は寛政元年七月の大坂番付に掲載されたのを最後に引退し、三年後の寛政四年に没した。徳島市城南町にある無縁寺焼香庵跡には、多くの阿波力士の墓碑があり、その中に笘ヶ島の墓碑も、諭鶴羽峰右衛門（文化十四年没）の墓碑と並んで建っている（図五Ａ）。表二にその詳細をまとめた。主塔東が正面で戒名「脱山普楽居士」その枠外下に「文化四卯歳云々」と後から彫った文字があり、おそらく妻女かと思われる。南は左面で「笘ヶ嶋井上浦右衛門」、北は右面で没年月日と施主名、大鳴門喜十郎は三社宮の略伝に依れば笘ヶ島の養子である。また略伝中、笘ヶ島の死因について「人の妬を受け毒殺に逢ひ遂に斃されたり」としているが、その真偽は不明であり、安永七年三月に江戸で看板大関を務めた阿波町出身の繪島潟灘右衛門が、現役中の天明元年八月に二十七歳で毒殺されたと伝わる話と混同している可能性も大いに考えられる。前後を含む同時代の代表的な力士の没年齢と比較しても、当時の四十七歳は特に早世という訳ではなかろう。

台座は三段あるが、上段の三面に人名が刻まれている。参照した阿波相撲番付は古い順に、寛政十二年十月に勢見山兵右衛門を世話役として佐古村で開催された興行番付、次いで文化十三年閏八月に諭鶴羽峰右衛門を相撲元として佐古大谷で開催された興行番付、そして天保二年十月に勢見山境内で開催された興行番付の三枚で、いずれも徳島県立文書館が所蔵する岩村家文書に含まれる。台座の左面には頭取四名と世話人九名、正面には十八名、右面にはおそらく石工の屋号（瓢金）と十三名（うち二

名は前述の木屋姓で、他の十一名と若干離れている）、正面左の花活けに勢見山兵右衛門、右の花活けに鶴ヶ滝剛右衛門の名が、それぞれ刻まれている。花活けの二人を含め、笘ヶ島と同時代または以降の江戸大相撲番付に掲載された力士の名は少なくとも九名確認され、笘ヶ島の優れた育成手腕と影響力が感じられる。

笘ヶ島を名乗った後世の力士たち

笘ヶ島没後に同名を名乗った力士は、多くは知られていない。「大相撲人物大事典」に依れば、天保七年十月に江戸で入幕した象ヶ鼻倉之助が天保八年十月の五日目に笘ヶ島へ改名したそうだが、天保九年二月には十万ノ海剛右衛門に再改名しており（後に音羽山峰右衛門）、名乗りはごく短期間であった。

天保九年頃からの大坂相撲には、笘ヶ島榮太郎という九州頭書の力士が中相撲におり、関取改名附に依れば前名は「もみぢ山」とある。この力士は江戸に出た形跡はないが、東海地方以西の西日本で活躍しており、現存する阿波相撲番付でも天保九年九月（勢見山境内）と、同十二年十月（富田秋田町）の番付で上段に名がある。天保十一年六月の大坂では東二段五枚目、同年十月の桑名では小結であった。

また文化文政年間には、寛政年間に徳島藩抱えだった陣幕嶋之助の弟子に「友ヶ島」を名乗った力士がおり、その後に江戸で高見山彦蔵→龍門鯉之助（文化十年一月に入幕）→師匠の名を継いで陣幕島之助と改名している。勝川春亭が描いたこの力士の化粧廻し姿の錦絵は、後に陣幕久五郎が改版して寛政の陣幕に仕立てたと言われる。

おわりに

江戸の大相撲土俵にて単場所ではなく、継続して長らく幕内を務めた阿波徳島藩出身の力士は、笘ヶ島が初めてである。笘ヶ島は谷風を複数回破った相撲上手の実力派で、また鬼面山や勢見山をはじめ有力な弟子達を育成した名伯楽でもあった。すなわち江戸時代、後に相撲王国とまで称されるに至った阿波徳島藩の名を全国に知らしめた、最初にして最大の功労者であり、このような傑出した人物を顕彰することは、郷土史を後世に語り継ぐ

上で大変有意義なことと思われる。それだけに、面白おかしく脚色された不正確な物語を鵜呑みにして安易に現代の地域おこしを狙うのではなく、対象に敬意を払いながら史実を的確に検証記録することが、何よりも重要であろう。

付記一　阿州奇事雑話より（カギ括弧内は本来空白、追加文字は筆者の推定）

笘ヶ島浦右衛門は身長五尺七寸中相撲の「躯」也幕内の相撲に入っても小前髪と云る程の事也然れども地磐強力の上相撲を修行して名人となって安永年間に東都に東の方の大関其比向相手の無き「伊達ヶ」関と取て是に勝て其時に仙台侯より「伊達ヶ」関の名を削って谷風と改め其余外濱長濱佐渡可嶽猪名川などを見事に勝て谷風後も三都伊勢等にて谷風と勝負し天下に相撲の名を「示」し其比の商売人の付札に苦印と書しを一向に負けぬとの浪花などの衆負より仕出せし也と風聞せり此苦可島の身長並体の貫目に引合して左様の大相撲にはり勝てぬ割合なれど也何分に至って気取のよき相撲取にて明日東方にて年来名人の相撲と出会ふ笘なれば其前夜に西方の其類の上手の相撲と「相」取し又は翌日向を強力大兵「な」る相撲に当れば此方に居る大兵強力と取組し色々と取方を工夫し是非に勝つべき手を工夫仕出して多分に勝れる也且相撲に勝ちたる時に花褒美として諸方より多くの金銀降集りても之を貪り貯ふ心「持」なえて金銀衣服等もあれば有るだけに手下の相撲取に分ち与へ勝手に遣はせ財宝も何とも思はぬ大気にて相撲の名人なる上にも又「　」らしき割遣る男にて何角と評判高しと也

付記二　三社宮拝殿内の略伝（□は判読不明）

苫ヶ島浦右衛門畧傳

島谷友吉は讃州の人一夏夫婦共稼の目的とて廣島浦に来り婦臨月となり現北川向百十七番屋敷大西梅太郎氏先代納屋に生る時元和元年（三二三年前）秋にし拾三歳の春を迎え仝地某方に小守として雇はれ石材四拾貫を肩に荷ひたると云ふ其大力に驚嘆せさるもの無し後大阪に登り木屋惣右衛門を師とし更に江戸表に大関等と角技をなし此外猪名川佐渡ケ嶽外ヶ濱にも勝ち名聲四海に轟たる

當時の俚謡にも阿波で一番名を挙げたるか五百羅漢に苦が島と以て其盛名察すべきなり浪華商人の符諜に苦印を書したるものは決して負けぬと云ひしと云ふ養子喜十郎初め大鳴門と云ひこれまた驍名を馳せたり惜むべし浦右衛門人の妬を受け毒殺に逢ひ遂に斃されたり時寛文元年（二七六年前）四拾七歳成り今も子孫のもの有り故に一二傳説を記さんとす浦右衛門身長四尺八寸体重四拾八貫目大阪堂島にて虫干中に際し夕立ありて左右の軒下に五斗俵を投げ込みたること早き此上なし時町人身躯の小なるをみて鼬と綽す廣島北川向一ノ誠野神社は誕生地を距る西北十数間の所にあり麻植郡川田村巡業の折柄其地に立寄大相撲を其社地にて興行し四本柱御免棒は此時差許された仝社の老松も三抱あり力藤七口半あまりありなれど今も枯れし株残れり大西家は先代寒暑の別なく婦人は時々発汗するあり之苦が島の力を入れたる時なりと汗に し何事敗すなし実に奇体の現象なりと云ふ今茲に有志の請に應し畧傳梗概記し社殿に奉掲し後代に傳へんとす

昭和拾弐丑歳壱月

松茂村廣島

七三翁　岡崎拾翠

謝辞

本稿をまとめるにあたり、小池謙一氏、剛田明治氏、土屋喜敬氏、松下師一氏、山下和也氏、徳島県立文書館に調査ご協力頂きました。また松茂町歴史民俗資料館の菅野将史氏には、令和四年三月に講演の機会を頂きました。この場を借りて心より御礼申し上げます。

参考文献

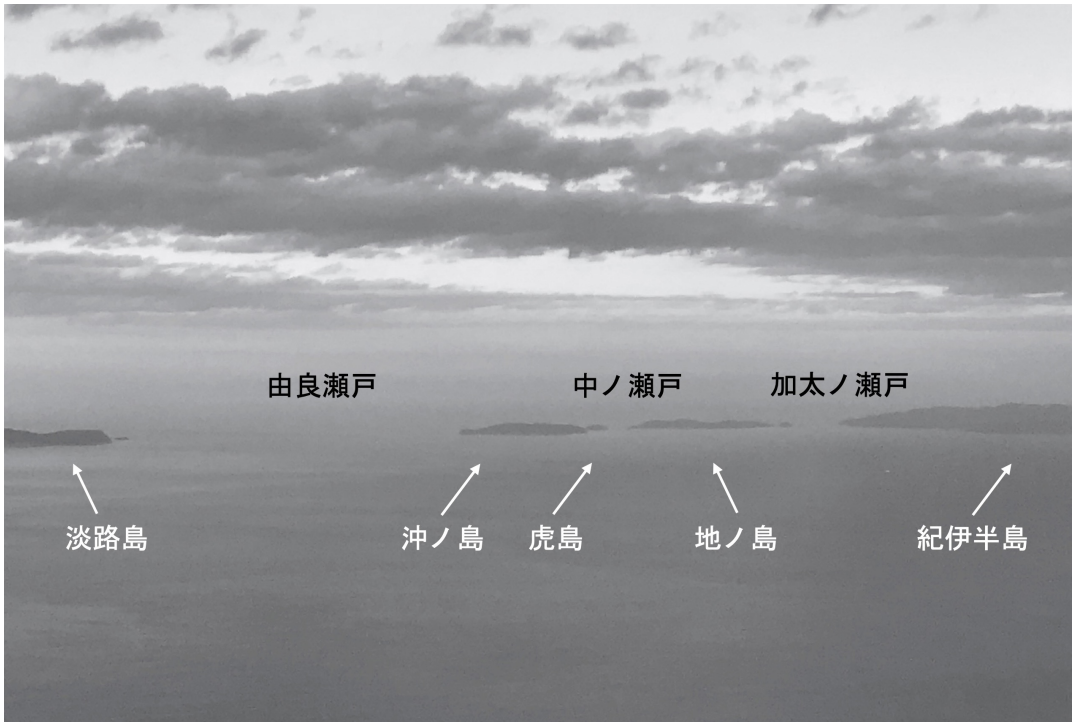
相撲起顕　十輯（明治四年刊、三河屋治右衛門）
日本相撲史　上巻（昭和三十一年刊、酒井忠正、ベースボール・マガジン社）
大相撲人物大事典（平成十三年刊、「相撲」編集部、ベースボール・マガジン社）
相撲今昔物語（昭和元年刊、「新燕石十種　第四巻」、廣谷國書刊行會）
阿波相撲史　（昭和四十六年刊、乾武彦、徳島新聞社）

松茂町誌（昭和五十一年刊、徳島県板野郡松茂町誌編纂委員会、松茂町誌編纂室）
『東西相撲全書』について（昭和五十六年九月刊、水谷藤博、季刊「東海の相撲史」第十二号、東海相撲史談会）
相撲百年の歴史（昭和四十五年刊、池田雅雄、講談社）
Sumo and the Woodblock Print Masters（平成六年刊、Laurence Bickford, PhD、講談社インターナショナル）
阿州奇事雑話　三（寛政年間、横井希純、写本徳島県立図書館デジタルライブラリ）
土御門院奉祀地問題と徳島（其二）粟種袋巻八（昭和十五年刊、田所市太、国立国会図書館デジタルコレクション）
阿波人物伝（昭和二十八年刊、横山春陽、徳島新聞社）

図表説明

図一　三社宮と笘ヶ島略伝および絵図
図二　友ヶ島群島
図三　勝川春章、東方力士土俵入図
図四　勝川春好、土俵上の真鶴と笘ヶ島
図五　笘ヶ島の墓碑
表一　江戸大相撲における笘ヶ島の星取り一覧
表二　笘ヶ島の墓碑詳細

図一：A, 三社宮の鳥居と拝殿(奥)。B, 拝殿内の略伝。C, 土俵入絵図。額はいずれも令和二年に更新されている。



図二：友ヶ島群島、紀淡海峡南の海上から。神島は沖ノ島の北側。

図三：勝川春章、東方力士土俵入図、天明二年十月。「相撲百年の歴史」講談社・昭和45年 (1970)・池田雅雄 編から引用。

図四：勝川春好、土俵上の真鶴と笘ヶ島、天明六年三月。「Sumo and the Woodblock Print Masters」講談社インターナショナル・ 平成6年 (1994)・Lawrence Bickford, PhD 著から引用。

図五：笘ヶ島の墓碑、無縁寺焼香庵跡(徳島市)。A, 主塔と台座上段。左は諭鶴羽峰右衛門の墓碑。B, 花活け左、勢見山兵右衛門。C, 花活け右、靂ヶ瀧剛右衛門。

江戸番付	○	●	他	初日	二日	三日	四日	五日	六日	七日	八日	九日	十日	備考
安永4年10月 東幕下7	5	1	2	○ 永浜	や	○ 達ヶ関	○ 佐渡岳	ア 越ノ海	○ 稲川	○ 外ヶ浜	● 十万ノ海	ア 宮城野		達ヶ関（後の谷風）に白星。
安永5年10月 東前頭5 (幕尻)	4	1	1	○ 八百岳	○ 永浜	○ 柏戸	○ 虹ヶ岳	● 外ヶ浜	ム 谷風	や	や			当年5月は不出場（番付不掲載） 新入幕、谷風に無勝負。
安永6年4月 東幕下筆頭	0	0	0	や	や	や	や	や	や	や	や			
安永6年10月 東前頭4 (幕尻)	4	2	2	ア 宮城野	○ 三國山	● 永浜	○ 佐渡嶽	○ 辰己山	● 越ノ海	○ 谷風	× 十万ノ海			谷風に白星。
安永7年3月 東前頭5 (幕尻)	5	4	1	○ 絹川	○ 三ツ汐	● 佐渡ヶ嶽	○ 三千ノ川	● 永浜	● 越ノ海	● 谷風	× 十万ノ海	○ 石見潟	○ 三國山	谷風に黒星。
安永7年11月 東前頭筆頭	8	0	1	○ 大比叡	○ 宮城野	○ 三國山	○ 三千ノ川	○ 鏡川	ム 十万ノ海	○ 佐渡ヶ嶽	○ 石見潟	○ 三ツ汐	や	最優秀成績。
安永8年3月 東前頭4 (幕尻)	0	0	0	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	
安永8年10月 東前頭4 (幕尻)	4	0	3	○ 待乳山	○ 鷲ヶ森	ム 永浜	や	○ 越ノ海	ム 稲川	や	○ 友綱	× 谷風	や	谷風に引分。
安永9年3月 東前頭3	5	1	0	○ 要石	○ 屏風岳	○ 戸田渡	○ 友綱	○ 宮城野	● 谷風					谷風に黒星。
天明元年10月 東前頭3	0	0	0	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	前年10月と当年3月は不出場 （番付不掲載）
天明2年10月 東前頭筆頭	3	0	3	○ 由良ノ戸	○ 所縁山	○ 廣ヶ崎	ア 谷風	ム 高崎	や	ム 宮城野	や	や	や	当年2月は不出場（番付不掲載）
天明3年3月 東前頭筆頭	3	2	1	○ 武蔵野	や	○ 御所車	○ 黒岩	● 谷風	× 籬野	や	● 宮古川	や	や	谷風に黒星。
天明3年11月 東前頭3	1	1	3	や	ム 高崎	や	● 谷風	× 黒岩	ア 外ヶ浜	や	や	○ 沖津風	や	谷風に黒星。
天明4年3月 東前頭2	3	1	1	○ 鷲ヶ嶽	や	○ 十府浦	○ 鉄ヶ島	ア 沖津風	● 谷風	や	や	や	や	谷風に黒星。
天明4年11月 東前頭2	4	1	2	○ 錣川	○ 鷲ヶ嶽	● 黒岩	○ 鳥谷崎	ム 宮城野	ム 柏戸	○ 絹川	や	や	や	
天明6年3月 東前頭筆頭	4	2	2	○ 三ツ石	○ 岩戸崎	○ 築間川	● 関ノ戸	ア 真鶴	● 谷風	や	○ 二所ヶ関	× 出羽海	や	前年は江戸大相撲興行中止 谷風に黒星。
天明6年11月 東前頭3	0	0	0	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	
天明7年5月 東前頭２														興行中止
天明7年11月 東前頭筆頭	0	0	0	や	や	や	や	や	や	や	や	や	や	
合計	53	16	22											

表一：江戸大相撲における笘ヶ島の星取り一覧

位置	面		記載事項	阿波番付(地位)	江戸番付（最高位）	備考
主塔	左（南）		笘ヶ嶋 井上浦右衛門		安永4/10～天明7/11(東前筆頭)	
	正面（東）		脱山普楽居士 文化四卯歳 本覚妙境女 六月二十九日			枠外の下部中央に記載、妻女か？
	右（北）		施主　大鳴門喜十郎 寛政四壬子歳閏二月十八日			養子
台座	左（南）	頭取	井筒惣兵衛			
			靄ヶ関市右衛門	寛政12/10(東頭取)		
			田靄川弥吉	寛政12/10(東頭取)		
			芳山善助	寛政12/10(世話役：右)		
		世話人	振り分大蔵			
			若野川浪右衛門	寛政12/10(東頭取)、文化13/閏8(西頭取)		番付では「和歌ノ川浪右衛門」
			二反獅子久作	寛政12/10(東頭取)		番付では「二段獅子久作」
			種ヶ嶋七兵衛	寛政12/10(東頭取)	天明4/3(東幕下4)	江戸番付では「種ヶ嶌吉平」
			園瀬川弥右衛門			
			漣亀蔵	寛政12/10(東頭取)		番付では「三ヽ浪亀蔵」
			花筏多助	寛政12/10(東世話人)		
			小櫻平五郎	寛政12/10(東頭取)		
			木村一安			
	正面（東）		鳴山音三郎		安永8/10～天明6/3(東三10)	
			津田海善兵衛		寛政3/11(東幕下11)	
			和田海万太夫	寛政12/10(西幕下10)、文化13/閏8(西頭取)	寛政元/3～寛政3/4(東三18)	
			淀車辰右衛門	寛政12/10(西幕下8)		同地に墓碑現存
			高越山虎蔵	寛政12/10(東三17)、文化13/閏8(東世話人)		
			井筒利吉	寛政12/10(東幕下8)	寛政5/10～寛政8/3(東三2)	
			玉津嶋吉兵衛			
			靄ヶ峯常吉	文化13/閏8(西スケ)？天保2/10(東頭取)？		後にスケ/頭取の靄ヶ峯滝左衛門か？
			浪花浦新蔵		安永8/10(東序ノ口19)	番付では「難波浦」
			水名瀬川万蔵			
			渦ヶ崎傳之助		安永6/10～天明6/3(東幕下8)？	江戸で「力石良助・渦ヶ崎良助（了助）」か？
			駒ヶ嶽松之助	寛政12/10(西三20)		番付では「町之助」
			山越戸五郎	寛政12/10(東三19)		
			靄渡り万吉	寛政12/10(西三27)		番付では「岩右エ門」
			遠山順次	文化13/閏8(東世話人)		
			眉山房吉			
			向山茂吉			
			熊野浦六之助	寛政12/10(西三9)、文化13/閏8(西スケ)		
	右（北）		助任町　瓢金書			
			吉川佐兵衛	寛政12/10(西世話人)		
			白山清次郎			
			大嶋利三次			
			七ヶ森豊吉			
			三ヶ濱儀助			
			栂之尾兵乍			
			麓獅子惣吉	寛政12/10(東三15)、文化13/閏8(西三18)		番付では「宗五郎/宗吉」、後に頭取(天保2/10)
			井筒川富之助	寛政12/10(西世話人)		
			大瀧文吉			
			坂瀬川長助			
			斛渡り礒之助	文化13/閏8(西世話人)		番付では「礒五郎」
			木屋總太兵衛			
			木屋傳之助			
花活け	左		勢見山兵右衛門	寛政12/10(世話役：中央)	天明8/4～寛政11/11(東小結)	同地に墓碑現存
	右		靄ヶ瀧剛右衛門		安永4/10～寛政3/11(東前3)	

表二：笘ヶ島の墓碑詳細

相撲趣味 第196号（非売品）

令和4年（二〇二二年）12月28日発行

発行所　相撲趣味の会
東京都墨田区東向島三―三七―七―五〇八
野中方（〒131・0032）
☎〇八〇―六六四〇―二四四二
郵便振替（〇〇一七〇―三―五五六七六九）

編集兼発行人　小池謙一
東京都三鷹市牟礼二―一四―一四―六〇一
（〒181・0002）
☎〇四二二―四四―五六一二

製作　（株）医聖社
東京都千代田区西神田二―七―四　島崎ビル
（〒101・0065）
☎〇三―三二六四―八六三九

掲載書誌情報：相撲趣味 **196** (2022) 1-14